大同江下流の先史地理

三友國五郎

大同江下流沿岸には先史時代原史時代の遺跡が比較的多く、古代朝鮮に於ける一つの文化圏をなした地域である。現代朝鮮に於てもやはり平壤が西鮮の中心をなしてゐるのと同樣である。本文に於いてはこれらの先史遺跡を土臺として、この地方が先史時代に於て如何なる狀態にあるかを究明したいと思つてゐる。卽ち遺跡地の分布、又は現狀・遺物等から綜合的に解釋を施して、古代の地理的狀態を復原し、更に交通關係、先史聚落分布、社會狀態等を考慮して、出來得べくんば一つの先史地誌を述べたいと思つてゐる。しかし本地方にありては遺跡地の發掘が科學的になされたものは僅々一二に過ぎず、大部分は表面採集の域を脫してゐないから或ひは不可能かも知れない。

一、豫備考察

大同江

大同江は平壤を中心として發達してゐる肥沃な沖積平野を洋々と曲流してゐる。その全長三九七・〇五粁、流域面積は一九、三八五・四六方粁朝鮮第五位の河である。延長百里に及ぶ大同江の流れは水と平地とを惠んで、住民を養ひ、重要なる交通路を提供して、文化の流入を助けてゐる。あらゆる意味で大同江は平安南道全域の人々を養ひ、且つ交通せしめてゐる。平安南道と云ふ一行政區劃はこれを大まかに云へば大同江流域とも云へる。

この大同江は南江合流點を境として著しく相貌を異にしてゐる。南江合流點より上流は山地を流れてゐるが、

それより下流にかけて所謂樂浪の平原を貫き、美林里、林原面等の肥沃な沖積平野を作り、よく大河の下流としての相貌を備へてゐる、こゝに平壤の如き大聚落を生ずるに至つた。大同江が深く奥地へ達するために、水上陸上の交通路として古來如何ばかり役立つて來たか。遡航し得る距離は本流に沿うてのみでも、二六〇粁即ち全長の六割、河口から六三粁遡つた所にある、保山浦までは二千噸級の汽船が遡航し得る。平元線もこの大同江に沿ふて走り、滿浦線も亦一部分これに沿ふて走つてゐる。かくて半島を横斷する一つの重要な交通路なること現代も古代も同樣である。更に京義線は南北に走つて、北は平北に南は黄海道に何の障碍もなく易々として交通路を開き得るのである。

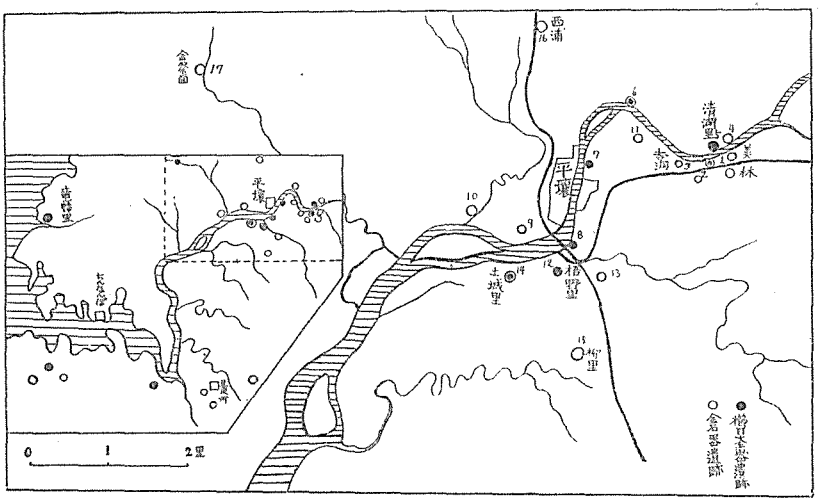
樂浪準平原

平壤を中心とする地域を論ずるに當り更にその地理的景觀を述べて、先史地理の豫備知識となさう。この地域は小藤博士の古朝鮮地方と呼ばれた所であつて、東方の大白山脈の走る區域を除けば一般に丘陵地をなし、殊に平壤より南方黄海道方面にかけては平坦な地であつて、所謂樂浪準平原と云はれる地域もこゝである。古き文化の中心であつた樂浪の遺跡附近はその代表的な地域で、誠に武藏野臺地を思はせる樣な、悠々たる丘陵の連り、青い麥の穗波は詩情をそゝるものがある。あちらこちらに點綴してゐる雜木林、丘陵の麓にあるさゝやかな聚落、丘上にある赤いキリスト教會、そこから響いて來る鐘の音、誠に長閑な朝鮮獨特の風景である。中和驛から平壤に至る樂浪古墳群地帶は老年地形の代表的なもので、この準平原を掩うてゐる赭色土は石灰岩中の不純物が溶蝕から殘されて積つたもの、粉末狀であるために雨や水にあふとひどく粘つて水透しが極めて惡い。この關係で一般作物には餘り香しくない、一般に畑は麥が主で粟、高粱の如きもの之につぎ、小川の沿岸には水田が發達してゐるのが見られるがまだ草原、荒地が廣く殘されてゐる。土地が低平で、しかも耕地は尠く離れ〳〵に散在するから、小さな部落が極めて不規則に存在して大聚落は發達してゐない。

二、遺跡分布

平安南道に於いて遺跡地の最も濃厚に分布する區域は平壤から美林・清湖里に及ぶ大同江沿岸一帶で特に大同江の左岸に濃厚な分布を示してゐる、今これらの遺跡地を列擧すれば次の通りである、笠原烏丸氏、小野忠明氏に負ふ所が多い。

1、大同郡秋乙美面美林里遺跡
2、大同郡秋乙美面休岩洞附近
3、大同郡秋乙美面寺洞
4、大同郡林原面高坊山麓
5、同　同　清湖里
6、同　同　酒岩洞
7、平壤府東大院里
8、同　京義線鐵橋附近
9、同　平川里
10、大同郡古平面陸軍墓地附近
11、大同郡大同江面飛行隊附近
12、同　同　梧野里
13、同　同　將進里
14、同　同　土城里
15、同　龍淵面柳里



第一圖　平壤附近遺跡

以上の諸遺跡地は平壤を中心とした大同江岸の洪滿平野、又はそれに準ずべき處に立地してゐる。特に比較的古期に屬すべき櫛目文土器を出土してゐる遺跡地が期せずして大同江岸に沿ふてゐるのも不思議な程である。

16、大同郡西川面西浦
17、大同郡金祭面院場里

この二つは大同江とは關係のない地に立地して孤立的な感がある。

大同江のずつと上流に

18、成川郡成川面石田里

にあるのが現在知られてゐる者で最奥であらう。以上平壤附近の遺跡地群に對し、平壤から下流の大同江沿岸には遺跡地らしいものは見當らない。高句麗古墳群はあるけれども、たゞ古墳封土の中に石器の出土してゐた事を鳥居博士が報告してゐるのみである。

海岸方面に近づくに從つて遺跡數も多くなつてゐる樣である。卽ち黃海道黃州から黃海道殷栗郡にかけて遺跡の立地が多い。平壤を中心として成立した遺跡群に對してこの遺跡群の立地も又興味あると云へよう。

黃州を中心として、

19、黃州禮洞里貝塚
20、黃州外下里
21、安岳郡安岳面五里洞
22、鳳山郡文井面土城里

等がありて大同江支流の載寧江の流域に多く分布してゐる。

殷栗郡は殷栗面を中心とし比較的廣い盆地が展開し、東・南は高さ九百米位の標高の山にかこまれ、北・西の方面は黃海に開いてゐる。この小盆地に

23、殷栗郡南部面軍糧里
24、同　同　砂金洞
25、同　北部面雲山里

等がある。こゝの遺跡地は櫛目文土器を併出する比較的古期に屬すると思はれるが、反面後期と思はれる點も多い、特に著しい點はドルメンを必ず伴ふ事で、ドルメンの中より石器を出してゐる實例が數多く鳥居博士によつて報告せられてゐる。

三、遺跡の地域性

次に各遺跡地の內主なるものを記述して平壤附近（西

鮮地方）の遺跡地の地域的特色とも云ふべきものをのべて見よう。

清湖里遺跡

平壤府を東に去る約六粁、大同江の右岸にある。昭和七年十一月笠原鳥丸氏によつて發見され、且つ報告せられてゐる。本項の記述は同氏の報告を基礎として若干私見を加へたにすぎぬ事をお斷して置く。

本遺跡は大同江によつて作られた砂土の多い沖積地上に營まれ、北側には古成層からなる土地が東西に走つてゐる、その高さは百米足らずの山稜である、西方はずつと平壤まで沃野連り高句麗古墳群の多い沖積地に接してゐる。附近には平時には渴水する小流がある。遺物は東西一五〇間南北五〇間の地域に亙り、特に遺物の濃厚なのはこの區域の中央部と見られる稍々高臺の砂丘でその廣さ南北十五間・東西五〇間、周圍より高きこと約五尺、大同江を去る約八〇間・現在水面よりの高度は九尺である、現在は落花生が栽培せられてゐる。表土約六寸の内に最も遺物が多く、表土を除去すると黑褐色を呈する稍粘質の土層がある、厚さ一寸、ついで五寸の砂層がある、これを第一層となし、第四層までこの如き層序を繰り返してゐる、この深度三尺以下には砂土著しく粘質を加へ遺物の存在も認め得ない。各層序の厚さ相等しきは大同江の氾濫が周期的なりしを示現し、先史時代より約四回の大氾濫ありしものと推定される、今この層序と遺物の關係を表示すれば次の如し。

遺物＼層序	表土	第1層	第2層	第3層	第4層	合計
第一種土器	435	192	202	72	38	939
第二種土器	10					10
第三種土器	4					4
第四種土器	2					2
打製石斧	3	2	3	3		11
磨製石斧	9					9
石鏃	2					2
石錘	637	31	73	9	9	759
石庖丁	2					2
木炭			少量	少量	少量	
住居址					1	1
爐址					1	1

第一種土器に屬するものは中には土質の精良なるものもあるが、概して粗鬆である、微細な砂粒と共に多量の雲母片を混入して、殆んど例外なく紋樣が附飾せられてゐる、その色澤は淡黃褐色のもので所謂櫛目文土器であつて、朝鮮各地より出土する先史時代土器である。平壤附近にても最近各所にその出土を報告せられてゐる、卽ち美林里、酒菁里（小野氏）、梧野里（小野氏）、船橋里にありては二ヶ所、土城里等はこれである。

第二種土器は第一種櫛目文土器に比して、その土質著しく精良で燒成に於いても遙に堅緻である、概して轆轤の製作にかゝるが如く且つ研磨が加へられてゐる。

第三種土器は明らかに轆轤を使用し、土質著しく精良で色澤は灰青色を呈するものが多い、戰國時代から漢代にかけて發達した所謂瓦器類であると推定せられ藤田敎授の所謂原始新羅燒土器とは蓋しこの土器に與へられたる名稱であらう。この種土器は平壤附近にありては樂浪古墳より鐵器銅器と出土し、禮洞里貝塚にては骨器、鐵器と共に採集せられ美林にても屢々發見されてゐるもので、先史時代末期若しくは金石器併用期の初期にかけて出現したものなることは是認せられる。

第四種土器は內地の所謂祝部土器、若くは朝鮮の新羅燒土器とその類を同じうせるものでこの土器が前三者に比して後期のものたるは言を俟ない。

石　器

本遺跡出土の磨製石斧がその刃部の構成に於いて片刃であるが十分研磨を加へられたものと、全然研磨を加へられざるものとある。所謂磨製片刃石斧が金石併用時代の所產なりとすれば本遺跡發見の磨製石斧類は先史時代の終末期より金石併用時代の初期と推定せられる。しかしてその大いさ二寸乃至三寸の小型で粘板岩で作られた爲めに扁平なるものが多い。この磨製石斧は表土のみより採集せられてゐる。これに反し打製石斧は表土より第四層に至る各層より十一個を採集してゐる、打製石斧は櫛目文土器と併出すると云へる。若し然りとすれば打製石斧は磨製石斧よりも古きものと推定をなし得る、笠原氏はこの打製石斧を利器として使用すると共に土器の施

文具として使用したであらうと力説してゐる。

石鏃は二本。

石庖丁も二個所謂半月型のものにあらずして矩形をなし刃部は片刃で孔を有してゐない。

本遺跡に於いて最も多く發見されるのは石錘である。扁平な手頃の石を採り、その兩端を打ち碎いて以て糸をかけるに便せるもので、主として漁網に使用せられたものと推定される。その大なるものは長軸二寸五分・短軸二寸に及び、小なるは長軸七分、短軸四分なるものもある。各層中に於いて發見せられ特に上層に至る程多く發見されてゐる事は本遺跡占居の住民が終始漁撈に從事せる事を示し、且つ人口增加卽ち漁撈に從事する者が次第に多くなりたるを示すと云へる。

前表に明なる如く磨製石斧、石鏃、石庖丁等は表土のみより出土し、打製石斧・石錘は表土のみならず各層より出る事は注目すべきで、これによつて前者は後者より遲れて使用せられた事を示してゐる。土器に於いても同樣に第一種櫛目文土器が最初に出現し、ついで第二種、第三種土器が現はれてきた、この點ははつきり區別をなし得るわけである、かくて先史時代土器たる第一種櫛目文土器は打製石斧を併出し、磨製石斧は第二種、第三種と併出する事が考へられ、磨製石器類が所謂先史時代の終末期若しくは金石時代初期にかけての所產なる事が推察される。

尙ほ本遺跡の石器に就いては小野忠明氏が論攷せられて九個の石斧の中で只だ一個の磨製石斧を示されてゐるのみで、この磨製石斧が平壤附近の櫛目文土器に隨伴するたゞ一個なる事を力說してゐる。石庖丁は何れも無孔の長方形で片刃のもの三個を圖示してゐる。

第四層中に住居址が發見されてゐる。所謂敷石住居址で比較的扁平な大小樣々の石塊が何等の秩序もなく點々と敷きならべられてゐる。その廣さは發見せる爐の遺構を中心として推測して見ると方六尺と推定される。その中央部に爐址があつて小型の甕型土器大破片の一群があつた。爐址は大小樣々の石塊を以つて稍々方形に組み合され、各石塊の間隙には第一種土器の破片が挿入せられ

内徑約八寸深さ六寸の爐で、中には若干の木炭片があつて、殘灰はない、住居址敷石間にも土器破片が挿入せられてゐた。

これらの報告に基づき本遺跡地を復原するに、住居址又は爐址の遺構より推察するに、其の單純にして粗末ながらも占居民族が半定住生活に入りつゝあるを知る事が出來る、石器に於いても長大なるものゝなきは、その生産過程極めて幼稚にして、未だ農耕を知らざるものゝ如きも、されど石庖丁の發見せられし處より見れば農耕生活を示唆する如くにも思はれる。石鏃發見少く、夥しき石錘の發見は狩獵より漁撈生活を本位とせる事を示すと云へる。江岸の砂丘上に占居せる人達であるから當然の事である。かくの如きは江岸に住める住民の地理的環境に應ぜるもので、民族的習慣なるや否は資料乏しきため斷定を下し得ぬ。

美林里の遺跡

美林里の遺跡は清湖里と相對し大同江南岸の沖積地にある。この沖積地は本地域にありては比較的大なる沖積平野で現在は大同江水を揚水して水田を開拓しつゝある。先史時代にありてこゝが最も繁榮した地域をなしたと推定される。鳥居博士も「平安南道に於ける有史以前の遺跡中寺洞里、美林里及び高坊山等一帶大同江畔は本道に於ける代表的遺跡地なり」と稱してゐる、寺洞より始まりて休岩洞より美林驛に至る鐵道線と大同江との中間にある砂地の畠地には所々に遺物の散布地があつて、見事なる石劍、各種の石鏃、優美なる石庖丁等數限りなく出土してゐる。今鳥居博士の報告によつて、これらの遺跡地を概觀すれば次の通である。

寺洞の遺跡地　無文土器の破片・石斧・石庖丁・錘石・石槌・石鏃等出土す。こゝの石斧は大同江岸より自然石を拾來りて、これにすこしく先端に加工を加へてゐるもので所謂蛤刃をなすものが多い。石庖丁は半月型をなし上部に二孔を開いてゐる普通のものである。

高坊山附近の遺跡　石斧・石鑿・石庖丁・石鏃・砥石等を始として土器の存在もあり。就中石庖丁の出土は最も多く散布せり。石鏃はスレート質にして磨製、そ

の形狀に二種あり、尙ほ石器中最も奇なるは形狀小にして重量重く、上より見れば恰も四瓣花の如き文鎭樣のものあり、這は何に使用せしか、まだ朝鮮に於ける他の遺跡よりかゝるものを採集せし例なし。土器は總て破片となり居れども、尙ほ口邊・胴部・底部を見るを得、燒成粗造にして土質は雲母を含めり。

高坊山は前述の淸湖里遺跡の北方に聳ゆる山であるが鳥居博士の報告せられてゐる高坊山附近の遺跡は前述の笠原氏の發見報告せられた淸湖里の遺跡とは全然異なるものであると信ずるからこゝにその概況を述べた。

美林里遺跡

鳥居博士の發掘によれば現今表土より一尺五寸の下部に薄き砂利層がある、石は河原石が自然に水平に並列してゐる。蓋し洪水その他の理由によつて堆積したものであらう、この薄き砂利層の下部に骨片及び土器等を包含する八寸程のA層があり、更にこれに連續してこれに似た七寸程のB層が連續してゐる。この層は石器・土器その他の遺物を包含して居り、その下部には人爲的の遺物はない。

A層より動物の骨片、土器の破片、木炭等が出土し、骨片には哺乳動物として鹿・猪・犬・牛の角、又は齒牙・下顎骨或ひは四肢骨及び鳥類の骨片等あり、その骨片は等大に折れてゐる。恐らく煮沸に便なる方法を採りしものと推定せらる。尙ほこの層中には灰及び木炭等多くあり、木炭は樹木の幹枝をたきたるものにして、その木目を見るに多くは栗樹なるが如く檢定される。恐らくこの邊一帶は落葉樹の繁茂せる深林にして鹿猪の片骨あるを以つて、この深林中にこの如き動物の群棲せしものなるべし、土器は素燒灰褐色にして外面に打紋樣又は格型等あり。尙ほ土器の破片にしてその周圍を缺き圓形となして小兒の玩具となせる如きものあり、この層より發見せられる、利器には一つも石器なく、專ら鐵を以つて器具とせし跡あり、卽ち小刀子の破片及び釣針狀形のもの、又は小鐵塊一を得たり、かくて彼等は鐵器の使用者なりとは云へ、その生活狀態はこれらの遺物より見れば、當時盛んに狩獵の行はれたるを知るを得、所謂自然民族に

して當時農耕せしや否やは考ふる能はざる所なり。

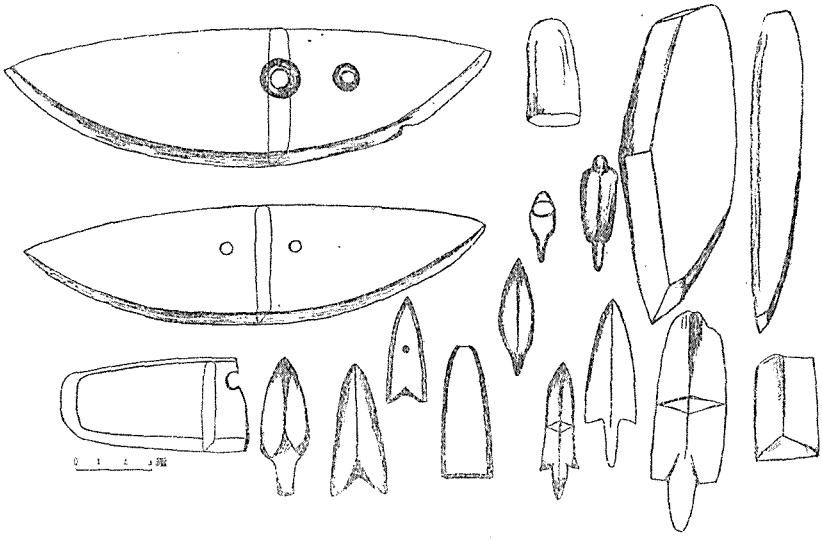
B層にありては之れに反して鐵器と覺しきものは一つもなく純然たる石器時代である。石斧・砥石・石庖丁・石鏃・石環等多く石斧には蛤刃にして半磨製、中央に穴をあけたる六頭の石斧もあり、有機的遺物として鹿・猪・犬或は齒牙の大なる動物の小骨片存在するのみ、栗樹の本炭も殘つてゐる。更に著しきは煮焚したる竈場か、土地燒けその色赤色を呈しその上に不完全に石を組んでゐる。こゝに存在する土器は何れも無紋樣にして一も外面に幾何的紋樣なく、薄手にして雲母を混じてゐる。

尙ほ四年前鑛業所工夫宮本某なるもの土工の際偶然四枚の石を組み合せその上に長方形にて長さ九尺幅九尺餘の蓋石を一枚乘せたる高さ一尺五寸程の墳墓に掘りあて試みに之を發掘せしに、その中に存在する二本の石鏃を得てゐる。これは有史以前の墳墓なるを語ると思はる。先史時代に於ける陵墓と遺跡との關係を示すものと云へる。

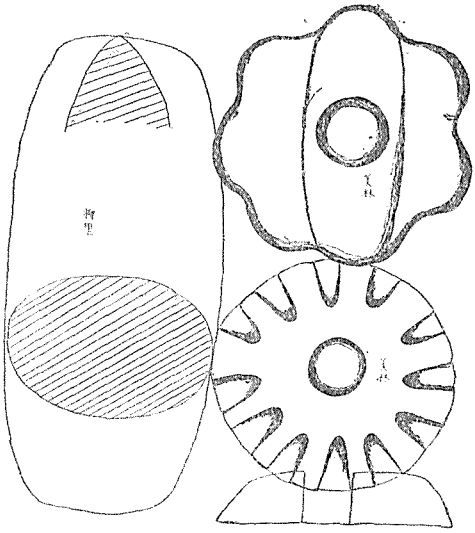
西村博士も美林遺跡を發掘されて、表土一呎八吋、その下部に丹色瓦片・丹色土器を含む約八吋の遺物包含層を認め、それに續いて鹿猪等の骨片多數を出す約七吋の層、その下部に厚さ不明の包含層を報告せられてゐる。その包含層の上部よりは多數の骨片と共に石庖丁二個、それより二吋下部に石斧・錘石・石鏃・土器の破片を檢出せられてゐる。

以上鳥居博士、西村博士の報告に基き、それに私が博物館、笠原氏宅等にて見聞したる遺物、及び最近の實地踏査によりて美林の遺跡地を概觀して見よう。

高坊山・美林等より出土する土器は笠原氏の所謂第二種土器に該當するものを主體となし、これに若干の櫛目文土器を往々檢出する事が出來る。土器の形式より見れば清湖里の先史時代土器より初まり、石器時代の終末期又は金石併用期の初頭と推定される無文土器が最も盛行してゐる、この土器は下層に檢出されるものと思はれる、これに續いて上層には樂浪古墳より出土する土器片、新羅燒に該當する土器片が多く出土するから、先史時代より既に聚落の立地があつて、先史時代終末期に最も榮



え、こゝに輝しい石器文化を築き、更に樂浪時代、三國時代まで及んだであらう事が推察される。この遺跡地が先史時代終末期に最も榮えたであらう事は、こゝより出土する饒多の石器群によつて示される。



第二圖　美林の石器

豪華なる石劍群、普通の石劍、有樋石劍、クリス型石劍に類似する闊の廣いもの等がある。南鮮地方に見る有柄石劍が見當らないのは南鮮地方と異なる處であらう。

石斧にありても長大なるは一尺に近い長さの斷面楕圓形をなす蛤刃のものから、普通河原石を採り來り先端を磨いて蛤刃になしたるもの、小なるものは長さ二寸五分内外の片刃のもの、又は恰も鑿を思はす樣な磨製の片刃石斧等幾種類もある。抉入石斧の見當らないのも南鮮地方と趣を異にしてゐる。饒多なる石庖丁の發見、大小樣々であるが、半月型にして二孔を有するものが普通で、長方形の兩側に刃を有するものも稀に出土する、石庖丁にはこの二型式がある。そのよく研磨され、形態の整美せるは誠に石器製作の最高峰と云ふべきである、その石鏃製作乃至多頭石斧の製作に至つては技術の優秀なる驚嘆の他はない。先端の丸き石鏃、逆刺を有するもの、細長優美にして鋭利なるもの、扁平にして兩側に刃を有し、中央に一孔を有するもの、短大にして見るから丈夫さうなもの、等々、而して大部分は有莖なるも、稀には無莖にして、柄をつくるに便するため、深い抉入のあるものもあるが、概して無莖のものが乏しいのは南鮮地方と比較して著しい相違と云はねばならぬ。

多頭石斧の出土の多いのもこの遺跡の特色と云ふべく私の見た數だけでも五個に及び誠に精巧そのものと云ふべきである。

私はかくて、この數多の石器類、骨片に依つて彼等が狩獵生活を營んだであらう事を想像する。美林なる地名そのものが示す如く大原始林を想像する事も出來る。各所に多くの石錘又は土錘を出す事によつて、漁撈生活を營んだであらう事も想像される。しかり彼等は大同江畔の深林地帶に居住して、狩獵と漁撈の生活をなした自然民族であつた、しかしそれだけが彼等の生活全部であつたらうか、私は既に簡單ながら彼等が農耕生活を營み、社會的には團體生活に入つたであらう事を肯定したいのである。その理由は次の通りである。

美林里と寺洞間の沖積地には南北三百米、東西一粁餘の狹長な地域に五ヶ所の遺物散布地がある。勿論これらの遺跡地が同一時代に全部占居されたわけではない。或は順次他地域からこゝに移つたかも知れないが、かく狹い地域に多數の遺跡地がある事は或る意味で先史時代に

於ける人口稠密地帶と目せられるのである。直接農耕の存在を指示する遺物はないが、彼等がこの沖積地に定着しようと云ふ意志を看取する事が出來る。その二は前述の如く豐富な石器群の存在である。石劍にしろ、石鏃にしろ個々に分析して考へる時は各種の利器の發達によつて益々狩獵の術は發達し、盛んになつたであらう、しかしその事は同時に農耕の方法の發達を暗示すると云へよう。石器文化に著しい文化の輝きを見せるものが、全く狩獵のみの自然生活に依存するとは考へられない。

石庖丁の出土の多い事等は簡單ながら農耕生活を示すと云へよう。石庖丁の出土は無文土器と關係ある樣に思はれる、美林ではないが、美林と同質の遺跡地と考へられてゐる金祭面の遺物にもみすり器の如き長大なる石器が博物館に陳列されてゐる、この石器の如きは農耕生活を雄辯に語るものと云へよう。私は以上の如き理由によつて、この遺跡地は直接農業を指示する遺物はないが、石器の種類の多いこと、特に石庖丁の發見の多い事に依つて農耕生活の存在を肯定したいと思ふ。

美林遺跡地には櫛目文土器の發掘が屢々報ぜられてゐるから、清湖里と同樣純然たる石器時代に入るべく、次いで無文土器によつて代表される先史時代終末期乃至金石器併用期にかけて最も繁榮をなし、こゝ石器文化を現出したるべく考へられる。

大同江沿岸の遺跡地

大同江沿岸の遺跡は既述の如く清湖里、美林は云ふまでもないが、それより下流平壤附近にも多い。卽ち

酒岩洞遺跡地は小野氏によつて小破片ではあるが沈點文のある土器を採集されてゐる、古式の櫛目文土器と目されてゐる、附近は石器の散布地であり、江岸を去る二百米内外の距離にあつて、西北に小丘陵を負ふた沖積地である。

船橋里は平壤の對岸であつて、沖積平野をなしてゐるが、その處々から櫛目文土器を若干出してゐる。

樂浪土城里は、樂浪郡治址のあつた城内と目される所より、見事な磨製石斧・石庖丁・石鏃・土錘等を出してゐる遺跡地であるが、鳥居博士によつて櫛目文土器の出土

した事が報告されてゐる。

梧野里の遺跡地

平壤を去る西方半粁の處にある。平壤より樂浪郡治址に通ずる街道に添ふてある、遺跡地は沖積地に營まれてゐる。此所より發見される土器は總て沈紋を附された有紋土器が多く、大部分は燒成・紋樣共に清湖里のものに酷似してゐる、小野氏によれば小差として、列點紋・紐帶樣凸線を加飾したものがなく、清湖里には見られない蕨樣の押捺紋が少しながらあることである。清湖里に比して石器は尠く、僅かに石錘・砥石・打製石斧が採集されたに過ぎない。その他京義線鐵橋附近、又は平壤郊外陸軍墓地附近等に石器類乃至土器の散布を見る事が出來るし、平壤より寺洞に至る丘陵地、特に飛行隊附近は屢々石器の散布地として知られてゐる處である。

扨てこれらの遺跡地の特色は、二三は別として、多くの遺跡地に朝鮮では古い形式とされてゐる櫛目文土器を出すことである。しかしてこの櫛目文土器は現在の處では大同江岸にありて、平壤より、美林・清湖里の間の約八粁位の地域にあつて、他にはないことである。卽ち平壤附近にだけ聚つてゐるのである。西朝鮮では櫛目文土器の分布はこの他に大同江の下流、黃海道の殷栗郡、及び平南道龍蟠里貝塚がそれである。櫛目文土器の分布は大同江下流の海岸地帶と上述の平壤附近の二個所だけである。換言すれば西鮮にありては西部海岸地域と大同江中流地域が最も古く開けた事が肯定される。しからばこの大同江中流の櫛目文文化は何處から將來されたであらうか、恐らく下流の海外地帶より大同江を遡つたと考へるべきであらう。今の平元線を利用して北鮮に聯絡のあつた事も考へられるが、それは資料不足で如何とも斷じ難い。

大同江岸に立地した遺跡地の通性として、不思議にも大同江そのものに直接媒介された如く、深い關係のあつた事が推定出來る。卽ちこれらの諸遺跡の中で大同江に最も隔つた梧野里、土城里でも、江畔をさること二百米から三百米の所であつて、船橋里、休岩洞の如きは足下に大同江を眺めてゐる程である、そして何れも大洪水の

被害を受けたであらう沖積地に營まれてゐる。この點から見れば、先史時代以來、大同江の流路は殆んど變化してゐないと考へられる。

これらの遺跡地が多少の差こそあれ、石錘・土錘を必ず出土してゐるといふ事は、これ亦この遺跡地が大同江に依存した事を示すと云はねばならぬ。かくの如く考へればこれらの櫛目文化は大同江を遡江して、黃海方面より來たものである推定を降し得る、現在では平壤と鎭南浦とを聯絡する櫛目文遺跡地が未だ發見されないが、その發見も早晩はなされるものと信ずる。

かくて大同江中流に立地した先史時代遺跡はやがて、漁撈、狩獵から農耕へと發展するに至つて、川から平地へ、臺地へと進出したものであらう、比較的後期と思はれる遺跡地が大同江から隔つた奥地に多いのもこの一部を示すと云ふべきであらう。

しからばこの大同江附近の櫛目文土器群遺跡地に關係あるとみとめらるゝ黃海沿岸方面の櫛目文土器遺跡群を考察して見よう。

龍蟠里貝塚

遺跡は大同江下流の鎭南浦より北方二十數粁龍崗郡海雲面龍蟠里附近の沖積層に積成された臺地に營まれた貝塚で鳥居博士の手に依つて發掘されてゐる。貝塚は牡蠣蛤を主として、その他赤螺等がある、蛤は大きいが牡蠣は大なるものを認めず、魚類の骨片も多く、哺乳動物としては僅かに四肢骨の破片三片のみ、その大いさより見れば鹿・猪等にてはなく兎・狐の類である、鳥類の骨片、木炭・灰等も混じてゐる、石器には石鏃・砥石・錘石各々一個を採集せられてゐる。貝層中から沈刻による列點紋・直折紋等各種の紋樣豐富に出土してゐる。前記清湖里の櫛目文土器と何等かの關係を認める事が出來る。

次は大同江の南岸黃海道殷栗郡方面にも櫛目文土器を出土する遺跡地がある。鳥居博士の報告によつて記載すれば次の通りである。

殷栗郡南部面軍糧里

此の遺跡は遺物包含地にして附近に接近してドルメンが存在してゐる。石器は乏しきも土器の破片は頗る多い、

尚ほこの遺跡にて注意すべき事は當時の竈場の跡がある、片麻岩破片を以て組み合せ、不完全なるも食物を煮炊するに使用したるものであらう、栗樹よりなる木炭もある。附近のドルメンの天井石の下部に當る石壁中に環狀の石斧の破片を得て居られる。

安岳郡邑内面五百里洞

一つの丘陵あり五里洞と稱す、ドルメンと共に石器時代の遺跡散布す、石斧・石劍・石鏃・石庖丁・環石・その他土器破片、口邊に突起せる緣に一種の小さき凹み紋樣を並列して刻してゐる。

鳳山郡土城里遺跡

極めて僅かであるが厚手式有紋土器（櫛目文土器）を出してゐる。

以上の三遺跡地は櫛目文土器のみの單純なる遺跡でなく、複合した遺跡で、平壤附近の美林遺跡の如く、又は海州南山遺跡の如く、櫛目文土器が代表する、純然たる石器時代から比較的後期と目せられる、金石器時代に及ぶ遺跡地であるから、可なり長い間連續した遺跡をなしてゐる。

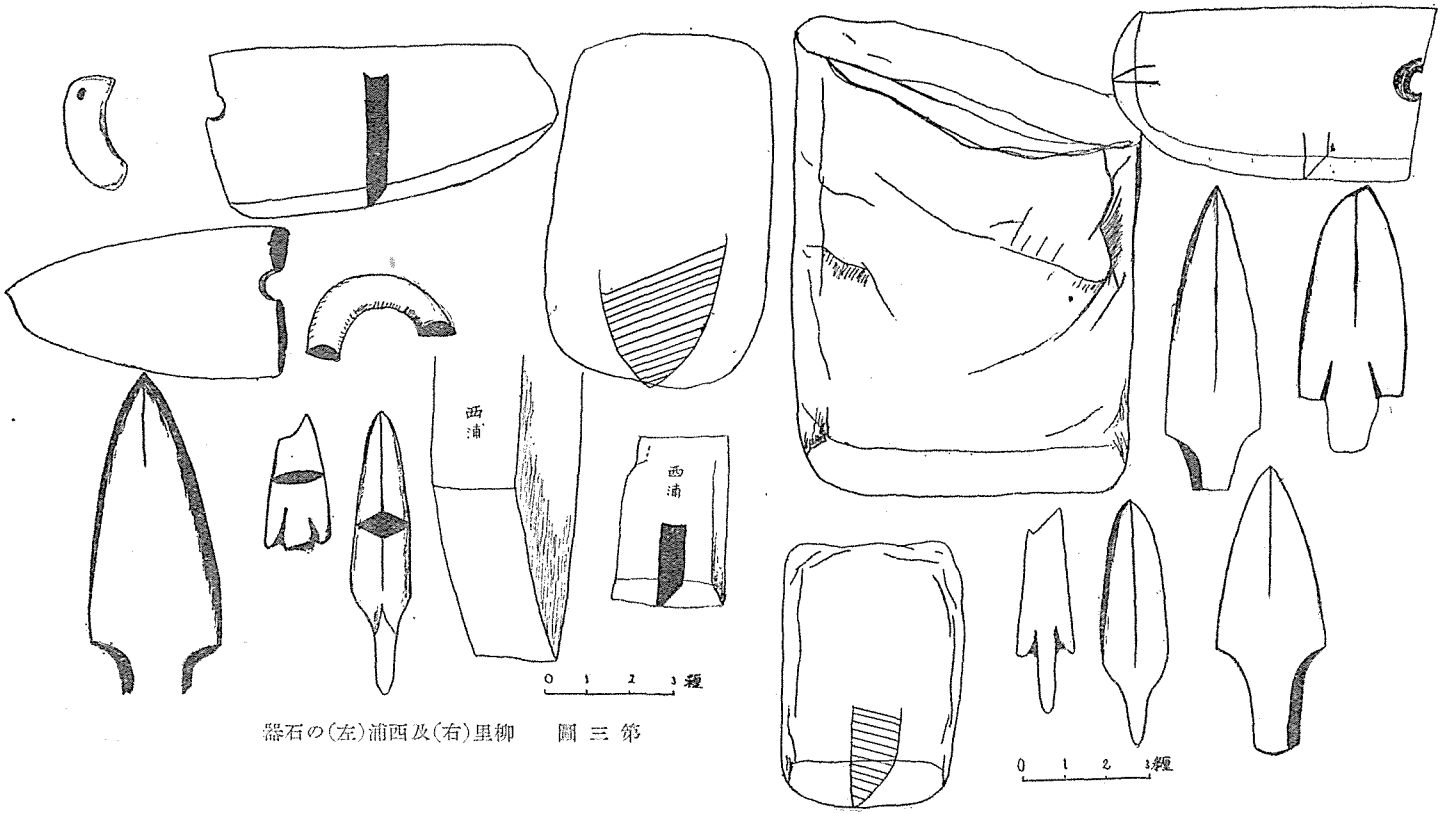
かくの如く大同江下流の海岸地帶方面は櫛目文土器の出土する遺跡が多く集つてゐる。この如き遺跡分布は大同江中流の平壤では更に著しいのである。さればこの兩者を結合したものが大同江であつたと考へる事が出來る。先史時代にありても大同江は重要な交通路をなしたと考へられる。

比較的奥地にある遺跡地

柳里遺跡（大同郡龍淵面柳里）

平壤南方約六粁の地點にあり、樂浪古墳群地帶の南端に位し、樂浪特有の丘陵と低地の交錯した處である。附近に標高九五米の小峰があつてこの平原の單調を破つてゐる。遺跡地附近の臺地は畠地であるが、窪地は水田をなしてゐる、その低地を大同江の支流昆陽江が蛇行してゐる。遺跡地は廣濶な臺地上にあつて快適の氣分がする。とりたてゝ水利の便があるとか、要害の場所であるとか、特定の地理的條件にあると推定されぬ。

本遺蹟では土器類の出土は餘り聞かぬ處であるが、石



第三圖　柳里(右)及西浦(左)の石器

器の出土は恐らく美林についで豐富な遺跡である、土器は紋樣のある土器でなくして無文の土器である。石斧類の出土は可なり豐富であるが、その形式は美林と同樣に單なる自然石を拾ひ來りその先端に蛤刃をつけたもの、比較的長大な石に蛤刃を附した重量の大なる石斧と、板狀岩を加工した片刃のもの、扁平にして長大なるものは恰も鍬の如き感を與へるものすらある。かく石斧の形態を見ると千種萬別の樣であるが、以上の通りに分類され、利器であると共に農耕具としても使用された如く推察される。この石斧についで多く出るのは半月型の石庖丁で、各地に見るものと異なる處がない、未完成品もあるから、石庖丁がこゝで製作されたと見てよい、少い例ではあるが、長方形の側面に刃部を有するものもある、何れも片刃である、石鏃も石劍も可なり出土してゐるらしく、その先端は多く採集される。その形式は單純で美林の如く變化が多くない。圖示した如き短大な石鏃は平壤附近では餘り例のないもので、南鮮地方に多く見る樣である。石錘・土錘の出土の餘りないのは、本遺跡地が大同江と關係がなかつた事を示すと云へよう。

西　浦

平壤北方約五粁の地點に西浦驛がある、この附近丘陵の一帶が石器の散布地である、その主なる出土地は二個所ある、表面採集によつて、多數の青色土器（新羅燒）の破片が眼につく、石器は石斧・石鏃・石庖丁等である、石庖丁は未完成品にして穴を半分ばりあけかけたものもある、やはり石庖丁は他からの將來品でなく、こゝに製作されたと解せらる。

遺跡地は小丘陵の西側に面し、前面には低濕地をへだてゝ小丘陵に對してゐる、直接水利に便利でない。

院場里（大同郡金祭面院場里）

院場里は平壤の西方約二十粁の地點にあり、平壤・甑山間を連絡する交通路が走つてゐる。附近は老年期の山地をなし、小山地と小盆地の發達した地域であるが、その内でも比較的大きな面積を有する盆地である、遺跡地はこの盆地のほゞ中央に位し、小流に沿ふてゐる。この出土土器は無紋の土器・石斧・石庖丁・石鏃・石劍の破片が

散布してゐる、特に石製の有孔の裝身具と推定されるものが出土してゐるのは他に餘り例のないことで注目に價する。尙ほ特に珍らしいものは粉碎器と推定される石器である、現在平壤博物館に陳列されてゐる。縱約一・五尺の幅一尺位の厚さ約二寸の石板と、その石板と組み合せ式になつて、半分けづりとられてゐる石棒よりなつてゐるもので、明らかに穀物類を碎くに用ひたと推定せられる、これに依つて本遺跡が農耕生活を既に或る程度まで營んだと推定するにかたくない。よしこの遺跡が先史時代のものとしても、この長大な器物を見れば農耕生活を肯定せざるを得ない程である、私はこゝの遺跡の出土土器に就いては餘り知らぬが、前述の裝身具・石器等から考へて、金石器時代以後の遺跡地と推定してゐる。

以上の三遺跡地を通覽して見ると、その三者は互に相隔つて地理上の連絡はないが、その性格に相類似してゐる所が多い。

先づ出土物から見れば石庖丁が比較的多く發見されてゐる事、石錘、土錘等の出土が殆んどなく、從つて大同江と關係のない事、石庖丁に未完成品が各遺跡地に發見されてゐて、石器が各自製作され、相互の間は交易等の連絡がなかつた事等は類似點の主なるものである。

特にこれら遺跡地附近の調査の粗漏もあらうが、現在ではこれら遺跡地が孤立してゐる事である。院場里の如きは古代文化の中心であつた美林、樂浪方面から、例へ大同江の支流があるにせよ二十數粁もへだつてゐる。西浦も同樣と云へよう、柳里は多少接近してゐると云へる、お互は相等の隔りをもつてゐる。この如き遺跡の分布は今日の平壤附近の聚落分布とよく類似し、現今でも平壤より一歩郊外に出れば極めて貧弱な聚落が不規則に點在してゐるのみである。この如き聚落分布が行はれるのは所謂樂浪準平原と呼ばれる本地域の地形上、又は地理上から考へられる處で、既に述べた通りである。水系が極めて複雜であり、浸蝕によつて生じた小盆地が到る處にあるからである。この關係は現在の聚落分布に考へられるのみでなく、江西郡に多い高句麗の古墳分布を見ても同樣で、平壤附近の大地域には何百と云ふ古墳群が聚團

してゐるが、江西郡方面では大古墳を中心として數基位の古墳郡が各小盆地に存在して、全體から見て、あちらこちらに散在してゐる。この如き先史遺跡の立地から見ても各遺跡地は獨立して互に密接な關係がなかつたと考へられる。然るに大同江に沿ふてある多數の遺跡地はその分布から見ても互に關係し、大同江と云ふ媒介者によつて結ばれてゐたが、これらの奥地にある遺跡は夫々連絡する紐帶を缺いてゐる。

かく遺跡地が互に聯絡なく、ぽつねんと成立してゐる事は、各遺跡地を占居する人達が或る一定區域を占有したと見るべきであらう。

この如き考を以つて、遺跡地の地理的景觀を見ればそこに相似の所がある。柳里にしろ、西浦・院場里にしろ、何れも小丘陵と云ふよりは臺地に近い地形で他方は低濕な平原で現在は水田をなしてゐる地域である。小地域の平坦な處で農耕生活を營むべき場所と推定される、これらの諸點より考へて、彼等が狩獵のみによらず、農耕も營んだことを推定したい。

換言すればこれら三者に依つて代表される文化は石器に可なり進歩した姿を示し、その生産分野が擴大し、狩獵生活から農耕生活への過渡期を示すと云へよう、首飾りの如きは既にその生活に餘裕のあつた事を示すであらう。さはあれかくの如く石器文化にかゞやかしい發展を示した彼等も、その團體生活には依然として舊態を示しその間に團結のなかつた事が遺跡分布によつて推定出來る。

四、結　語

以上主なる遺跡地の記述に基づいて平壤附近の先史地理を考へるならば、悠久の昔、文化は大同江岸に起つたと見ねばならぬ、その文化は何處より來たかは明でないが、現今までの資料によれば黄海道方面より來たと推定せられる、大同江岸平壤より清湖里、美林に及ぶ大洪涵平野は蓋し先史時代の人にとりても第一に目についたものであらう。從つてこゝに起つた文化が次第に發展をなして行つて遂に美林の石器文化を築づくに至つた。美林

の文化は大同江と大洪瀚平野の持つ地域性に依つたものであらう。彼等先史人はこの廣々とした自由の天地に大同江岸より次第に奥地へ〳〵と進出したのであらう。彼等の生活は漁撈と狩獵であつた、大同江は水豐であつた、丘陵には森林が茂つて、獸類の棲息が多かつた。まだ農業は知らなかつたと解さねばなるまい。而しこの櫛目紋文化の人達もそういつまでも發展をせずに居るわけではない。やがて金石器時代に入ると漸く石器製作に非凡な腕を見せて來た、美林、土城里等はその代表的なもので、優秀なる石器の出土はこれを語るものであらう。櫛目文土器から無文土器、打製石器から磨製石器へと引き續いた遺跡地は黄海道方面にもあつた。

この石器文化の發達はそのまゝ、漁撈・狩獵から農耕への發展を示すもので、大同江から奥地へと進んで行つたのであらう。卽ちこの時代は金石器時代初頭頃の事であらう。

石器時代は大同江岸が聚落地帶であつたが、石器時代の終末期及び金石併用期初頭頃には大同江岸のみならず、奥地の小盆地小平坦地が聚落地帶となつて行つた。特に大同江畔の美林の如きは都市的色彩を多分に持つた處であつた。この如き現象には既に農耕生活の發展と云ふ事を考へる事が出來ると思ふ。

石器時代の遺跡地は大同江沿岸のみに密集して恰も集團性あるもの、如き立地をなしてゐるが、金石器併用時代の遺跡地はその文化圈が著しく擴大して來た故か、その遺跡地も點在性を增して、何か孤立性を示す樣な傾向がある。この平壤附近の文化圈が黄海道方面の文化圈と相接觸して融合するのもこの時期からであらう。

次に平壤附近の先史地理を述べるにあたつては、ドルメン群、漢代古墳、高句麗古墳群等の分布から觀察を下さねば十分と云へないが、その研究は後日の事とし、こゝに一先づ擱筆する。

參考文獻

一、鳥居博士、平安南道黄海道ノ有史以前　大正五年度古蹟調査報告

一、櫛目文土器を發見せる北鮮清湖里遺跡　笠原鳥丸氏　人

類學雜誌五一ノ六

一、朝鮮の擦切石器に就て　笠原烏丸氏　考古學雜誌二七ノ一二

一、朝鮮大同江岸櫛目文土器に隨伴する石器　小野忠明氏　考古學八ノ四

一、藤田亮策氏　朝鮮古代文化

一、朝鮮江原道の先史時代遺物　有光敎一氏　考古學雜誌二八ノ一一

一、鹿州附近發見の磨石器　齋藤忠氏　考古學　八ノ七

一、小牧實繁氏　「先史地理」

同　「歷史地理」